



「特別の教科 道徳」における授業づくりと評価： 主体的・対話的で深い学びの実現

柴原, 弘志

(Citation)

いま道徳教育とシティズンシップ教育を考える:1-10

(Issue Date)

2017-05-27

(Resource Type)

conference object

(Version)

Version of Record

(URL)

<https://hdl.handle.net/20.500.14094/90004025>



『『特別の教科 道德』における授業づくりと評価』

～主体的・対話的で深い学びの実現～

京都産業大学 柴原 弘志

1 基本的構造の維持と「考え、議論する道德」への転換(量的確保と質的充実)

「学校における道德教育は、特別の教科である道德を要として学校の教育活動全体を通じて行う」
(「小・中学校学習指導要領 2015」)

『『考え・議論する』道德への転換』の 意味することを
正しく理解し、本質的な改善を図る(「主体的・対話的で深い学び」へ)

心に響く道德教育(「考え・議論する」「豊かに感じ取れる」「実践意欲の高まる」道德)とするために

↓

「心に届く、知・情・意がはたらく⇒道徳的な判断力・心情・実践意欲と態度が育つ」道德科授業

↓ ⇔ 道徳的体験・実践(他の教育活動全体・日常生活)

教育活動全体を通じた取組(⇒校種間連携・地域ぐるみによる取組)⇔検証・改善

児童生徒が主体的に自己を見つめ深く考え、聴き合い、語り合う姿勢づくり

「主体的に学び合い、語り合う道德の授業づくり」

↓

キーワードは「学習状況」「子どもに聴く」「言葉(言語)化」「語り合い」
(授業改善) (観察と言語分析) (メタ認知・共有化・批判的思考力)

↓

主体的な学び・対話的な学び⇒深い学び
(アクティブ・ラーニングの視点)

主体的な学び

児童生徒が問題意識を持ち、自己を見つめ、道徳的価値を自分自身との関わりで捉え、
自己の生き方について考える学習
各教科で学んだこと、体験したことから道徳的価値に関して考えたことや
感じたことを統合させ、自ら道徳性を養う中で、自らを振り返って成長を
実感したり、これからの課題や目標を見付けたりすること

対話的な学び

子供同士の協働、教員や地域の人との対話、先哲の考え方を手掛かりに考えたり、自分と異なる意見と向かい合い議論すること等を通じ、自分自身の道徳的価値の理解を深めたり広げたりすること

深い学び

道徳的諸価値の理解を基に、自己を見つめ、物事を多面的・多角的に考え、自己の生き方について考える学習を通して、様々な場面、状況において、道徳的価値を実現するための問題状況を把握し、適切な行為を主体的に選択し、実践できるような資質・能力を育てる学習

深い学びの鍵となる「特別の教科 道德」における「見方・考え方」

「様々な事象を、道徳的諸価値を基に自己との関わりで(広い視野から)多面的・多角的に捉え、自己の(人間としての)生き方について考えること」(「中央教育審議会答申 2016」)

2 道徳科における学習指導と評価 (← 学習指導要領・解説内容等の理解)

◎ 「特別の教科 道徳」の目標 (極めて重要 「主体的・対話的で深い学び」は基本)

「(前略)よりよく生きるための基盤となる道徳性を養うため、道徳的諸価値についての理解を基に、自己を見つめ、物事を(広い視野から)多面的・多角的に考え、自己の生き方(人間としての生き方)についての考えを深める学習を通して、道徳的な判断力、心情、実践意欲と態度を育てる。」

↑ ↑

(「小・中学校学習指導要領 2015」)

参照「道徳の時間」の目標(これまでの「学習指導要領」)

「道徳の時間においては、以上の道徳教育の目標に基づき、各教科、外国語活動、総合的な学習の時間及び特別活動における道徳教育と密接な関連を図りながら、計画的、発展的な指導によってこれを補充、深化、統合し、道徳的価値の自覚及び自己の生き方についての考え(道徳的価値及びそれに基づいた人間としての生き方についての自覚)を深め、道徳的実践力を育成するものとする。」

○これまで「道徳の時間」の特質を規定してきた基本的概念との異同の吟味・確認

◇ 学校における道徳教育の目標及び「要」としての位置づけ

◇ 補充、深化、統合 (学習指導要領の「指導計画の作成と内容の取扱い」において説明)

◇ 道徳的価値の自覚 (「学習指導要領解説 特別の教科 道徳編」の各所に明示)

◇ 道徳的実践力

道徳的実践力 = 「道徳的心情、道徳的判断力、道徳的実践意欲と態度を包括するもの」

= 「道徳的価値を実現するための適切な行為を主体的に選択し、実践することができるような内面的資質」(これまでの「学習指導要領解説 道徳編」)

そして

◎ 「指導計画の作成と内容の取扱い」(配慮事項等) (重要 下線部は追加された内容)

他の教師との協力的な指導、計画的・発展的な指導、補充・深化・統合の役割を果たす指導

↓ ↓

(「小・中学校学習指導要領 2015」)

◇ 質の高い多様な指導方法への改善 (『特別の教科 道徳』の指導方法・評価等について(報告)等)

(「主体的・対話的で深い学び」⇒ ねらいの達成に効果的で成長を実感でき、学びがいあり!!)

↑ ↑

ノート等の活用(ポートフォリオ等評価)

「児童(生徒)が自ら道徳性を養う中で、自らを振り返って成長を実感したり、これからの課題や目標を見付けたりすることができるよう工夫すること。その際、道徳性を養うことの意義について、児童(生徒)自らが考え、理解し、主体的に学習に取り組むことができるようにすること。(また、発達の段階を考慮し、人間としての弱さを認めながら、それを乗り越えてよりよく生きようとすることのよさについて、教師が生徒と共に考える姿勢を大切にすること。)」

「児童(生徒)が多様な感じ方や考え方に接する中で、考えを深め、判断し、表現する力などを育むことができるよう、自分の考えを基に話し合ったり(討論したり)書いたりするなどの言語活動を充実すること。(その際、様々な価値観について多面的・多角的な視点から振り返って考える機会を設けるとともに、生徒が多様な見方や考え方に接しながら、更に新しい見方や考え方を生み出していくことができるよう留意すること。)」

「児童(生徒)の発達の段階や特性等を考慮し、指導のねらいに即して、問題解決的な学習、道徳的行為に関する体験的な学習を適切に取り入れるなど、指導方法を工夫すること。その際、それらの活動を通じて学んだ内容の意義などについて考えることができるようにすること。また、特別活動等における多様な実践活動や体験活動も道徳科の授業に生かすようにすること。」

(これらに限定されるものではない!!それぞれが独立した指導の「型」を示しているわけでもなく、それぞれの要素を組み合わせた指導を行うことも考えられる。)

読み物教材の登場人物への自我関与を中心とした学習

教材の登場人物の判断と心情を自分との関わりにおいて多面的・多角的に考えることを通し、道徳的価値の理解を深める。

様々な道徳的諸価値に関わる問題や課題を主体的に解決する学習

児童生徒の考えの根拠を問う発問や、問題場面を自分に当てはめて考えてみることを促す発問などを通じて、問題場面における道徳的価値の意味を考えさせる。

道徳的な問題場面例

- ① 道徳的諸価値が実現されていないことに起因する問題
- ② 道徳的諸価値についての理解が不十分又は誤解していることから生じる問題
- ③ 道徳的諸価値のことは理解しているが、それを実現しようとする自分とそうでない自分との葛藤から生じる問題
- ④ 複数の道徳的価値の間の対立から生じる問題 etc

道徳的行為に関する体験的な学習

疑似体験的な活動(役割演技・動作化など)を通して、実際の問題場面を実感を伴って理解することで、様々な問題や課題を主体的に解決するために必要な資質・能力を養う。



児童生徒が主体的に自己を見つめ深く考え、聴き合い、語り合う姿勢づくり

「主体的に学び合い、語り合う道徳の授業づくり」

道徳教育・道徳科における評価についての基本的な考え方



学習指導要領・解説内容及び「報告」内容等の正しい理解)

「児童(生徒)の学習状況や道徳性に係る成長の様子を継続的に把握し、指導に生かすよう努める必要がある。ただし、数値などによる評価は行わないものとする。」

(学習指導要領 下線部は追加された内容)

- ① **意義・前提**(「学習指導要領解説 特別の教科 道徳編」等より)

◇児童生徒にとっては自分の成長を振り返る契機となるものであり、教師にとっては指導計画や指導方法を改善する手掛かりとなるものである。したがって、常に指導に生かされ、児童生徒の成長につながるものでなくてはならない。

参考「学習指導要領 総則」の「教育課程の実施と学習評価」

「各教科等の指導に当たっては、」

「単元や題材など内容や時間のまとまりを見通しながら、児童生徒の主体的・対話的で深い学びの実現に向けた授業改善を行うこと」

「児童生徒が学習の見通しを立てたり学習したことを振り返ったりする活動を、計画的に取り入れるように工夫すること」

「児童生徒のよい点や進歩の状況などを積極的に評価し、学習したことの意義や価値を実感できるようにすること。また、各教科等の目標の実現に向けた学習状況を把握する観点から、単元や題材など内容や時間のまとまりを見通しながら評価の場面や方法を工夫して、学習の過程や成果を評価し、指導の改善や学習意欲の向上を図り、資質・能力の育成に生かすようにすること」

◇他者との比較ではなく児童生徒一人一人のもつよい点や可能性などの多様な側面、進歩の様子などを把握し、学期や学年にわたって児童生徒がどれだけ成長したかという視点を大切にすることが重要である。

◇教師が児童生徒一人一人の人間的・道徳的な成長を温かく見守り、共感的な理解に基づいて、よりよく生きようとする努力を認め、勇気付ける働きをもつものであり、児童生徒自身による(道徳的価値に裏打ちされた人間的な)成長の振り返りや道徳性のはぐくみを支援するものである。それは、教師と児童生徒の温かな人格的な触れ合いに基づくものでなくてはならない。

◇それぞれの時間における指導のねらいとの関わりにおいて、児童生徒の学習状況や道徳性に係る成長の様子を様々な方法で捉え、それによって自らの指導を評価するとともに、指導方法などの改善に努めることが大切である。

道徳科の評価の在り方(『特別の教科 道徳』の指導方法・評価等について(報告) 2016年7月22日)

- ・道徳性の育成は、資質・能力の三つの柱の土台であり目標でもある「どのように社会・世界と関わり、よりよい人生を送るか(「学びに向かう力・人間性等」)」に深く関わる。
※「感性や思いやり等については観点別学習状況の評価になじむものではなく、そうした評価の対象外とすべきである。」(教育課程企画特別部会「審議のまとめ(素案)」2016年8月1日)
- ・資質・能力の三つの柱や道徳的判断力、心情、実践意欲と態度それぞれについて分節し、観点別評価を通じて見取ろうとすることは、児童生徒の人格そのものに働きかけ、道徳性を養うことを目的とする道徳科の評価としては、妥当ではない。
- ・道徳科については、「道徳的諸価値についての理解を基に、自己を見つめ、物事を(広い視野から)多面的・多角的に考え、自己の(人間としての)生き方についての考えを深める」という学習活動における児童生徒の具体的な取組状況を、一定のまとまりの中で、児童生徒が学習の見通しを立てたり学習したことを振り返ったりする活動を適切に設定しつつ、学習活動全体を通して見取ることが求められる。
- ・個々の内容項目ごとではなく、大きくくりなまとまりを踏まえた評価とする。
- ・他の児童生徒との比較による評価ではなく、児童生徒がいかに成長したかを積極的に受け止めて認め、励ます個人内評価として記述式で行う。
- ・学習活動において児童生徒がより多面的・多角的な見方へと発展しているか、道徳的価値の理解を自分自身との関わりの中で深めているかといった点を重視することが求められる。
(観点例後述)

- ・一人一人の児童生徒の学習状況や道徳性に係る成長の様子について
特に顕著と認められる具体的な状況を記述する。

- ・個人内評価を記述で行うに当たっては、その学習活動を踏まえ、観察(発言が多くない・記述することが苦手な児童生徒もあり、発言や記述ではない形で表出する児童生徒の姿に着目することも重要)や会話、作文やノートなどの記述、質問紙や面接などによる方法を工夫
- ・発達障害等の児童生徒についての配慮すべき内容等を学校や教員間で共有(ユニバーサルデザイン)
- ・現在の指導要録の在り方に関する総合的な見直し⇒指導要録の改正(「特別の教科 道徳」の欄)

【今後の方向性】

- ・保護者の理解を促進する取組が大切
- ・道徳科の指導方法や評価、指導要録の在り方については、その取組状況を踏まえ、不断の見直しを行うことが重要
- ・各学校における組織的・計画的な取組や、それに基づく具体的な評価方法の蓄積が急務

教師用指導資料の作成と具体的事例の共有が必要

② 対象

◆**道徳性(成長の様子)** → 各校重点項目や特に顕著で伝えたい内容等について記述

◆**学習状況(学習への取組状況及びその成果)**や**学習指導過程**⇒授業改善

道徳教育の実質化・充実のためには

◆**カリキュラム(マネジメント)** ← 学校評価による検証(→諸計画の実効性)

道徳性(成長の様子)の評価

① 道徳性とは?! (「学習指導要領解説 特別の教科 道徳編」参照)

人格の基盤をなすもの 人間らしいよさ

人間としての本来的な在り方やよりよい生き方を目指してなされる**道徳的行為を可能にする人格的特性**

道徳的諸価値が一人一人の内面において統合されたもの (一つとして同一のものはない)

「**道徳的判断力**」「**道徳的心情**」「**道徳的実践意欲と態度**」を構成の諸様相とする**内面的資質**

② 道徳性の評価において確認しておきたいこと

◎「道徳性が養われたか否かは、容易に判断できるものではない」

(「学習指導要領解説 特別の教科 道徳編」)

- 道徳性は児童生徒の人格全体にかかわるものであり、生涯通じてはぐくみ続けていくもの
- 道徳性の育みは、多様な場面で様々な要因のかかわりの中で行われるもの
- 道徳性の変容は、多くの場合即時的な発現を示さない
(長期的・継続的・総合的・協働的な評価姿勢)

学習状況(学習への取組状況及びその成果)や学習指導過程の把握と評価→授業改善

「特別の教科 道徳」の目標(極めて重要 再掲)

「(前略)よりよく生きるための基盤となる道徳性を養うため、道徳的諸価値についての理解を基に、自己を見つめ、物事を(広い視野から)多面的・多角的に考え、自己の生き方(人間としての生き方)についての考えを深める学習を通して、道徳的な判断力、心情、実践意欲と態度を育てる。」

これまでに見られる実践事例『道徳(の時間)に関する記録欄・所見欄』

「多様な感じ方や考え方の交流を通して、～の観点から～に気づき、～という考え(理解・心情)を深めるとともに、～への憧れを強め、～しようとする発言・記述がみられた」等々

(さらに後述の観点例を参照して、その実践研究の蓄積とその成果を共有化することが大切!!)

学習評価の基本的な考え方 (指導要録)

「学習評価は、学習指導要領の目標の実現状況を把握し、指導の改善に生かすもの」

「児童生徒の学習状況の把握と評価は、学習指導過程における指導と評価を一体的にとらえることが重要である。学習指導過程を評価するためには具体的な観点が必要である。確かな指導観を基に、明確な意図をもって指導の計画を立て、学習指導過程で期待する児童生徒の学習を具体的な姿で表したものが観点となる。その観点をもつことで、指導と評価の一体化が実現する。」

(「学習指導要領解説 特別の教科 道徳編」参照)

評価の観点例(あくまでも事例)

求められている「**学習活動**」の存在及びその成果(**学習状況**)をもとにしたもの

- ◆ ねらいに含まれる道徳的価値についての理解を深めることができたか(学習活動の存在も)
- ◆ ねらいに含まれる道徳的価値の理解を基に、自己を見つめられたか(1度とは限らない)
- ◆ 同上、物事を(広い視野から)多面的・多角的に考えられたか
- ◆ 同上、自己(人間として)の生き方についての考えを深めることができたか

↓ ↓ **(報告)「特別の教科 道徳」の指導方法・評価等について**
(平成28年7月22日)

- ◆ 他者の考え方や議論に触れ、自律的に思考する中で、一面的な見方から多面的・多角的な見方へと発展しているか
- ◆ 多面的・多角的な思考の中で、道徳的価値の理解を自分自身との関わりの中で深めているか

(そのほか、道徳的価値等に対する「自覚」のレベルなどを観点にすることも考えられる)

そのためにも ◇ **「曖昧なねらい」からの脱却が重要**(P9の参考資料参照)

あれもこれもではなく、この時間にどういった学習活動を通して、いったい何をねらっているのか明確化・具体化する

【指導と評価の一体化という意識と具体的スキルの修得】

(もちろん、すべてが他の教科と同質ということではなく、長期的・継続的評価意識やスキルも必要)
ただし、あれもこれもはできない!

(評価の理論的可能性と実際の評価活動の実現性は異なるもの)

各学校現場において、実践を交流し、できるところからできることを着実に(限界の存在を前提としつつ)

評価の方法例 (基本は観察と言語分析)

誰が・・・授業者, 児童生徒, 他の教師等 (児童生徒による評価(受け止め)を生かす)
どのようにして・・・授業中の観察・授業中の発言や記述内容の分析(ノートの活用等)
児童生徒による自己評価(振り返り等)や授業アンケート等の活用
他の教師による評価の活用
授業前後の観察・授業後の記述内容等の分析
「ポートフォリオ」等を生かした評価(⇒ノートの活用等) etc

なお, 道德性の高まりや変容は, 比較的短時間に現われるものもあれば, 長期にわたる指導にまつものもある

多面的・組織的・計画的・継続的評価も必要である

個人内評価として, 道德的成長を認め励ますものにしたい

教材の選定と活用・発問

道德科の目標やそれぞれの時間のねらいの実現への効果を考える

小学校と中学校での相違 ⇒ 発達段階等を踏まえた計画的・発展的(系統的)な教材配列

◇ 「読み物教材」の活用方法の種類(活用方法 ⇔ 教材分析)

◇ 共感的活用(「起・承・転・結バージョン」等) 道德的に誰が変容したか? どこで? 何をきっかけに?

◇ 批判的活用

◇ 範例的活用

◇ 問題解決的活用

◇ 葛藤・選択判断的活用

◇ 感動的活用

etc

◇ 「読み物教材」のよさ ⇒ 最大限に生かす

◇ 収集・作成・加工に関して

◇ 活用に関して

⇒ 以上の認識を踏まえつつ, その時間の具体的なねらいを意識した多様な教材活用へ
教科書 + α (効果的な教材の開発と併用)

◇ 児童生徒の実態に即しているか(ズレはないか)

◇ 内容とその扱い方がねらいの達成に効果的か

⇒ 児童生徒に「聴く」

あまりされていない!!

多様な教材と活用の創意工夫 (現代的な課題や先人の伝記等も)

提示法や組み合わせ等も工夫

道德(科)の時間における教材とは?!

ねらいの根底にある道德的価値やそこからとらえた児童生徒の実態からの教材分析を通して, ねらいの達成に効果的な活用部分や活用方法を明確にしておく。

教材から「人間」が読み取れるか・「自己」と「人間」が深く見つめられるか

- ◎ 心の中を映し出す内視鏡としての教材
- ◎ 心を磨く砥石としての教材
- ◎ 人間としての生き方について考える為の共通の土俵としての教材
- ◎ 近くて遠い教材, 遠くて近い教材
- ◎ 複数教材の活用

道德科に用いられる教材の具備すべき要件(「学習指導要領解説 特別の教科 道德編」)

- ① 児童生徒の発達の段階に即し, ねらいを達成するのにふさわしいものであること
- ② 人間尊重の精神にかなうものであって, 悩みや葛藤等の心の揺れ, 人間関係の理解等の課題を含め, 児童生徒が深く考えることができ, 人間としてよりよく生きる喜びや勇気を与えられるものであること
- ③ 多様な見方や考え方のできる事柄を取り扱う場合には, 特定の見方や考え方に偏った取扱いがなされていないものであること

道徳(科)の時間における発問とは?!

考える価値・必然性のある問いづくり(→広い視野から多面的・多角的な思考)

- ◇ 考えたくなるような問い 考えざるをえない問い
- ◇ これまでには考えたことのないようなことや観点から考えようとする問い
- ◇ 他の人の考えを聴きたくなるような問い
- ◇ 自問・内省できるような問い
(新たな視点の提示, 概念くだき, 切り返し, 揺さ振り, 価値葛藤, 心理的葛藤)
 - ◆ イメージ ビリヤードのブレイクとその後の玉の動き
- ◇ 自己の生き方や人間としての(自己の)生き方について深く考えられる問い

自分の考えを基に話し合ったり, 討論したり(語り合ったり)書いたりするなどの言語活動を充実すること。その際, 様々な価値観について多面的・多角的な視点から振り返って考える機会を設けるとともに, 生徒が多様な見方や考え方に接しながら, 更に新しい見方や考え方を生み出していくことができるよう留意すること(「学習指導要領解説 特別の教科 道徳編」下線部は中学校 ()内は筆者)

教科化に際し改めて確認しておきたいこと

「道徳の教科化」を最大限に生かす!! ⇒ **道徳教育の実質化・更なる充実**
これまでの「領域としての枠組みでの充実」というスタンスからの変更

○メリットを最大限に生かし, 懸念される事柄を最小限にとどめる ⇒ **道徳教育の充実**

◇ 教員養成段階の充実, 道徳教育に関する研究者の増大 ⇒ 指導力等の向上

◇ 無償で配布される(検定)教科書の使用
(児童生徒の実態等に即した他の多様な教材の併用を前提)

◇ 積極的な評価意識と具体的な評価方法の工夫 ⇒ 授業改善(教材活用・指導方法等)
(基本的評価観への立脚と評価の限界を前提) 児童生徒へのより深い内面理解

◆ 評価活動への不安感・負担感の払拭並びに誤った認識による取組への是正 等々

児童生徒一人一人に豊かな「道徳性」の確かな育みを求めて!!

【参考文献】

小寺正一・藤永芳純編『四訂 道徳教育を学ぶ人のために』世界思想社 2016年

松本美奈・貝塚茂樹・西野真由美・合田哲雄編『特別の教科 道徳 Q&A』

ミネルヴァ書房 2016年

柴原弘志編『中学校 新学習指導要領の展開』明治図書 2016年

柴原弘志編『アクティブ・ラーニングを位置付けた 中学校 特別の教科 道徳の授業プラン』
明治図書 2017年

- 1. 学 年
- 2. 日 時
- 3. 主題名

家族愛 (C 主として集団や社会との関わりに関すること 小低(13)中(14)高(15) 中(14))
 ※簡潔に体言で表す。併せて内容項目(番号)を示す

- 4. ねらい

・・・(A)・・・(ex 登場人物などの道徳にかかわる行為や道徳的に変化する行為等について考えさせること・～に気付かせること・～を共感的に理解させること・～【道徳的諸価値】についての理解を基に自己を見つめ、自己や人間として生き方の学習 etc)を通して、
 ・・・(B)・・・(しようと)する・・・(C)・・・を育てる(養う、培う、高める、豊かにする etc)

- (A) : 教材の活用部分や活用方法(中心発問関連等)、学習活動等を簡潔に表記する
- (B) : 「内容項目」やその「指導の観点」等から適切に引き出す
- (C) : 道徳性 の諸様相 (道徳的判断力、道徳的心情、道徳的実践意欲と態度) 等を示す

※ (B)(C)の部分「大きなねらい」、(A)の中核となる学習活動の部分「小さなねらい」として明確化・具体化して示すという方法をとられている学校や地域もある。【「学習状況」を意識した取組】

- 5. 教材名

・・・(ex 『私たちの道徳』 文部科学省)
 ※教材の題名と出典を示す

- 6. 学習指導過程

	学習活動	主な発問や予想される児童生徒の反応	指導上の留意点
導入	例 ・事前の活動を確認する ・～を想起する etc	※授業への入り方(教材への導入、または価値への導入)	・効果的かつなるべく短時間で etc
展	教材を黙読する etc ※学習活動を記述 ・児童生徒が主語になる ・指示や発問ごとに児童生徒が活動することを書く	<div style="border: 1px solid black; height: 20px; width: 100%;"></div> ※ <div style="border: 1px solid black; display: inline-block; width: 100px; height: 15px;"></div> に 発問を書く 中心発問は、二重線で囲む ・の後に予想される反応等を示す <div style="border: 1px solid black; height: 20px; width: 100%;"></div>	教材を範読する etc ※指導上の留意点を記述 ・教師が主語になる ・児童生徒が考えやすいように ・話がそれないように ・ねらいに迫りやすいように
開	例 ・～について考える ・～について意見交流する ・～について記述する etc	<ul style="list-style-type: none"> ・ <div style="border: 1px solid black; height: 20px; width: 100%;"></div> <ul style="list-style-type: none"> ・ <div style="border: 1px solid black; height: 20px; width: 100%;"></div> <ul style="list-style-type: none"> ・ ・ ・ 	例 ・〇〇を押さえておく ・〇〇を補足説明する ・〇〇に気付かせる ・〇〇に共感させる ・〇〇の時は、問い返し、さらに深く考えさせる(重層的発問) etc
終末	例 振り返りシートを記入する ～のVTRを視聴する etc		例 評価資料として活用し、授業改善に生かす 余韻をもって終わる etc

- 7. 評価 ※この時間のねらいとの関係から、その学習状況等評価したい内容を評価方法(発言内容・記述内容等)とともに示す(長期的・継続的評価を必要とするものは別途)

『道徳授業は か・き・く・け・こ』

「道徳授業は難しい。」という声をよく耳にする。評価はあっても評定のない授業。進度にもそんなに頭を悩ませる必要のない時間。児童生徒さえのってくれば、児童生徒・指導者にとって、ある意味これほどゆとりの中で楽しく展開される授業・時間はないのかも知れない。

多くの道徳授業を参観させていただく中で、児童生徒が生き生きと活動し、人間としての生き方について深く考えようとした授業には、いくつかの共通点が見出だされる。

ねらいの設定，教材選定，中心発問づくり，学習指導過程の構想，事前事後指導の検討を進める上で留意していただきたい、「道徳授業づくりのポイント」をキーワードにまとめてみた。

「～べき」タイプの授業（指導者ばかりがよくしゃべる） → べきべき壊れる授業


「～たい」タイプの授業（児童生徒が主役，聴きたい語りたい考えたい） → 大切にしたい授業

道徳授業における「わかる授業」（→「学びがいのある授業」）とは
道徳的価値・人間としての生き方についての自覚へ

自己の生き方・人間としての生き方という観点から

- ① 自分がわかる（時として気付いていない自分の感じ方・考え方等がわかる）
- ② 他者(人間)がわかる（自分以外の人の感じ方・考え方・生き方等がわかる）
- ③ 道徳的価値がわかる（人間として生きていく上で大切なことがわかる）

聴ける・語れる・深く考えられる 集団

有意義な道徳授業を創造するには  以下の「かきくけこ」を授業の中に！

か 感動・葛藤（価値葛藤・心理的葛藤） → 考えたくなる
語り合い（←話し合い） 考える必然性のある問い 《改善》

き 共感（的理解）・疑問・気付き・驚き（既成概念・価値観くだき）
聴き合い 協働 共育（共に考え育つ・共に育てる）

く 食い込み（なぜ？どのように？等を大切にした重層的発問，反問教師）
児童生徒の言葉を生かす（←問い返しでさらに深く!!）

け 経験（児童生徒一人一人の具体的生活）の振り返りと活かし 《検証》

こ 交流（多様な感じ方，考え方）（授業は生きもの）こだわるな！